

個人質問



川原 春夫 議員

● 児童虐待について

Q いまだに痛ましい児童虐待が後を絶たない。本市における児童虐待の現状、また、市の体制はどのようになって

A 保健福祉部長 現状は平成22年度、相談受付件数として34件、23年度が36件、24年度は9月末時点で30件となっています。主たる虐待者別内訳ですが、母親による虐待が一番多い状況で、次に父親となっています。体制としては、合併当初から相談室を立ち上げ、家庭相談員が2人、母子自立支援兼婦人相談員が1人で対応しています。相談員が日々抱える件数は多く、現在の相談室の体制だけでは解決できないという状況を御理解いただき、民生委員協議会、

関係諸団体とのさらなる協力が必要と考えます。

Q NPO法人「児童虐待防止全国ネットワーク」の吉田恒雄理事

長は、児童虐待の現状に対して、深刻な人材不足と幅広い支援体制の確立を訴えている。本市として現在の相談室の体制で十分な対策が講じられると思うか。

A 保健福祉部長 相談員の充足と抱えている課題・件数等に対応する負担を考えると、相談室体制の充実を考えなければいけないと思います。

Q また、相談員だけではなく、総合的、且つ効率的な組織体制を横断的に考えるべきと考えます。

A 市長 限られた人的資源の中で取り組んでいかなければなりません。虐待が増えている現状を考えれば次年度、部内で調整を図りながら、この虐待防止にかかわれるマンパワーは増やして

いくという方針を立てています。市としても、いま一層努力してまいりたいと思います。

● 日向の森について

Q 「日向の森」の位置づけと今後の取り組みについて、市は日向の森の土地利用について、「100年後のふるさとへの贈り物」をキャッチフレーズに、4つのゾーニングを位置づけている。

A 私は今こそ市民参加で、一緒に自分たちの手で、出来ることから一歩踏み出していききたい、この思いが募っている。今、私も参加して、日向の森の一角で仮称「螢の里」作りを目指し、仲間と取り組んでいるものも、そういう思いからである。



(仮称) 螢の里づくりを進めている様子

そこで、日向の森の位置づけ、コンセプト、今後の取り組みについて、4つのゾーニングをベースに置いて、どのようにして具体化していくのか、その取り組みについて、どう考えているのか。

A 市長 日向の森については、土地利用検討調査を実施した中で、豊かな自然との調和を配慮する上からゾーニングし、一定の方向付けをしております。ただ、それはゾーニングという形だけで、将来どのような形

になっていくかというものが明確にされて、それを行政、市民が共有して、その方向に向かって歩み出しているというところまでには至っていないという現状です。大きなグランドデザインを描き切れないというのが現実です。将来どのようにしていくかという方向をしっかりと定めるとい

必要があります。その点につきまして、もう少しグランドデザインの明確化をするための時間をいただきたい。

「大きなグランドデザインを描き切れない」ということだが、高齢者や障がいをお持ちの方が散策できるような、四季折々の花を育てる取り組み、または、鳥取方式の芝生化でドッグランを造ったりとか、そういった何か箱物を建てなくても、今ある自然を生かしたままで、市民の皆さんの手をお借りしながら、一歩踏み出すことが出来るのではないかと考えるがどうか。

A 市長 議員のご提案は、十分私も理解をさせていただきます。そうした取り組みが出来ないというのを申し上げているわけではございません。プレゼンツリー、また、ワタミの森にしても、あるいは、議員自らが関わっていただいている谷津田の美化にしまして、一つ一つできるところからやっていたいというところ、こういった動きを続けていくことで、何らかのものができ上がるだろうとは考えます。それは、しっかりと皆様方と力を合わせて、できるところからやっていきたいと思

ます。私が申し上げたいのは、ここを将来的に市としてどのような形で活用していくのかというところについて、例えば、今、議員がお話のように、もしも、多少産業的な付加価値を見出すようなものを導入するならば、将来そういうものに変えるときには変えてもいいのではないかと